

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	Universitätsklinikum Carl Gustav Carus, Medizinische Fakultät Carl Gustav Carus der Technische Universität Dresden ドレスデン工科大学医学部カール・グスタフ・カールス大学病院
別タイトル	Universitätsklinikum Carl Gustav Carus, Medizinische Fakultät Carl Gustav Carus der Technische Universität Dresden
作成者（著者）	須江, 麻里子
公開者	東邦大学医学会
発行日	2015.03
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 62(1). p.76 77.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	世界の研究室から
著者版フラグ	publisher
JaLCDOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.62.76
メタデータのURL	https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD80132098

Universitätsklinikum Carl Gustav Carus,
Medizinische Fakultät Carl Gustav Carus der
Technische Universität Dresden



ドレスデン工科大学医学部
カール・グスタフ・カールス大学病院

須江 麻里子

東邦大学医学部内科学講座 (大森) 糖尿病・代謝・内分泌学分野

2013年4月より東ドイツのザクセン州、ドレスデンにあるドレスデン工科大学医学部カール・グスタフ・カールス大学病院で基礎および臨床研究を行っています。医学部の第3内科は内分泌疾患の中でも副腎疾患の研究を精力的に行っており、8つのプロジェクトが共同でドイツ政府からの3年間にわたるグラントに2回連続採択され、褐色細胞腫を始めとした副腎腫瘍、敗血症における下垂体副腎系、チェンバーを用いた糖尿病患者への膵島細胞移植、副腎からの幹細胞の抽出など多岐にわたる研究を行っています。中でも私の所属する Eisenhofer 教授のラボは high performance liquid chromatography (HPLC) や liquid chromatography-tandem mass spectrometry (LC-MS/MS) を用いた血中尿中メタネフリン、メトキシタイラミンの測定で褐色細胞腫患者の診断率向上に貢献している世界的に高名な教授です。現在これらの測定系が褐色細胞腫の診断のみならず、悪性褐色細胞腫の診断や、褐色細胞腫患者全体の30%以上が保持すると言われる遺伝子変異の予測にも有用であることを明らかにし、ドイツ、オランダ、スペイン、ポーランド等欧州7施設共同の2000人を対象とした長期前向き臨床研究を行っています。また臨床研究のみならず、腫瘍感受性遺伝子の作用やその変異が褐色細胞腫の特色である多彩な表現系に及ぼす機序等をテーマとした基礎研究も行われています。留学1年目は主に重要な腫瘍感受性遺伝子の1つである MAX 遺伝子に着目しラット PC12 細胞を用いて基礎研究を行い、測定系が充実しているという利点も生かして HPLC での細胞内カテコラミン含有量の測定、チロシンヒドロキシラーゼ活性の測定なども行いまし

た。留学2年目からは基礎研究と平行し、褐色細胞腫の臨床研究で欧州でも核となる施設に居ることを生かして臨床研究も始め、現在特定されている16の腫瘍感受性遺伝子を対象とした遺伝子変異と表現系との関連や、副腎偶発腫瘍のステロイドプロファイリングなどをテーマとして研究を進めています。ドレスデン工科大学医学部では世界各国からの研究者がさまざまなプロジェクトに従事していますが、プロジェクトリーダーやポストドクターの優秀さと実績実力はもちろんのこと、国際色豊かな修士・博士課程学生の精力的な研究ぶりという良い意味での野心的、アグレッシ



ドレスデン工科大学医学部カール・グスタフ・カールス大学病院
第3内科の外観
一般外来、救急外来、入院病棟、検査室、ICU、手術室を備えている

づさに刺激を受けています。

ドレスデンは人口52万人とそれほど大きくない都市ですが、数世紀にわたりザクセン王国の首都であった時代から現在に至るまで、文化、教育、経済等多分野においてドイツおよび欧州の中心都市の1つです。第二次大戦終了直前の空爆で市内は壊滅的被害を受けましたが、ドイツ東西統一後、保存されていた瓦礫を用いて再建された旧市街を中心に、美しい街並みがエルベ川沿いに広がるとても住みやすい街です。留学1年目は右往左往しているだけの期間もあり満足な成果が出せたとは言えませんが、留学2年目となり仕事の進め方も分かり始めたので、今後は自分のアイデアを生かしつつ、さらに研究を行って行きたいと考えています。

最後に、今回の留学に際し大変お世話になりました弘世教授、廣井教授、高松教授、芳野教授、秘書の清水さん、そして快く送り出して下さった東邦大学医療センター大森病院糖尿病代謝内分泌科の医局員の皆さんにこの場をお借りして厚くお礼申し上げます。



第4回国際褐色細胞腫・パラガングリオーマシンポジウム
(2014年9月、京都)にて
日本、ドイツ、オランダ、フランス、スペイン各国の若手
奨励賞・ポスター賞受賞者と記念撮影